

亀山絵本と童話の会

亀山市で産声をあげてから早40年余り。「亀山絵本と童話の会」は、創作童話の執筆と人形劇の上演、夏休みの手作り絵本教室を二本柱に、地域の子どもたちへ本物の文化体験を届けてきました。電話をかけると童話が流れる「テレホン童話」などその活動は全国的に注目され、文部科学省「地域文化功労賞」を受賞。現在13人のメンバーが集まり、活動を続けています。



代表 中根 章子さん

お問い合わせ

「亀山絵本と童話の会」
TEL 0595-82-0521
(亀山市立図書館や地区コミュニティセンター等で活動)

さわやかな風が吹き抜ける若草の季節、亀山市内で人形劇の練習が行われていました。色とりどりの衣装を身にまとった人形たちの動きに合わせて聞こえてくるのは、メンバーの元気な声と、チャイムなどの可愛らしい音楽。その場の全員が、いきいきとした笑顔で稽古に臨んでいます。練習の合間を縫って、代表の中根章子さんにお話を伺いました。

——昭和57(1982)年の設立から、今年で44年になりますね。

中根：最初は児童文学作家の久野陽子先生が中心になって、図書館で手作り絵本を作る会として始めました。私は

都会から亀山へ戻ってきた時に、市の広報で「手作り絵本作りませんか?」という案内を見つけて飛び込んだんです。その後、童話制作も始まり、名前を「亀山絵本と童話の会」に改めました。

——「テレホン童話」という、電話で童話が聴けるサービスを30年以上にわたって手がけていたそうですね。

中根：昭和61(1986)年、NTTからの依頼がきっかけでした。著作権のない創作童話を作ってほしいということで、全35号の冊子を作成。毎月2話ずつ、つまり全部で700〜800もの童話を作り続けたんです。こんなに長く続いたのは、全国で亀山の会だけだったそうです。その創作の積み重ねが、のちに

います。製本が終わったとたん、さっきまでもじっていた子が急にいきいきしてくる。子どもって本当に面白いですね。

——40年以上続けてこられた。長く活動を続ける秘訣は何でしょう。

中根：まず自分たちが楽しむこと。それと「ゆるさ」を大切にしていることでしょうか。介護や子育てで参加できない時期があっても、抜けたり戻ったり自由ができる。月2回の例会だけは続いています。強制はしない。でも、来られなくても辞めないんですよ。20年ほど前に淡路の人形浄瑠璃を見に行った

人形劇の演目にもなっていました。
——人形劇はどのように始まったのでしょうか。

中根：手作り絵本教室の休憩時間に、「ただ絵本を読むだけでなく、人形が飛び出してきたら面白いのでは」と思いついて。器用なメンバーがすぐ人形を作ってくれて、それを見た子どもたちが目を輝かせてくれた。それからは原作も人形も衣装も音楽も、全部自分たちの手作り。気づけば依頼がどんどん増え、あちこちに出向くようになっていたんです。

——脚本担当、人形制作担当、音楽担当と、さまざまな役割の人が自然と揃っているのが印象的です。

中根：不思議なことに、上手く揃っている

とき、80代の人形遣いの方々が現役でいらして。「みんなできる、80まで」と思いました。去年も新作を作りましたし、まだもう少し続けられそうです。

——人形劇が終わると舞台の裏を覗きに来る子どもたち。その姿が何よりの喜びだと、中根さんは目を細めました。デジタルの時代にあえて手作りにこだわって、「直接の触れ合い」を大切にできた会の歩みは、きつと子どもたちの心の中に、静かに灯り続けています。ありがとうございました。

インタビュー…杉本友美



人形劇の練習に集まったメンバーの方々



全35号にわたり制作された冊子



手作りの大型絵本



目を丸くしながら人形劇を楽しむ子どもたち※



これまでに作ってきた手作り絵本の数々